学校教育目標　かしこく　たくましく　心豊かな　児童の育成
目指す児童像　瞳・笑顔・汗・会話　きらきら輝く　鈴谷の子

令和７年１月３１日号
家庭数配付

鈴谷小だより

令和６年度　第１０号
さいたま市立鈴谷小学校　☎８５２－５６７５
鈴谷小Ｗｅｂページアドレス　https://suzuya-e.saitama-city.ed.jp/

足下を知ること

校長　　中田　清人

身内の醜態をさらすようですが、私には２人の娘がおり、日頃から「校長の話なんか誰も聞いてないよ」、「野球の話とかやめて。『オオタニ』とか言われても、興味がないからピンとこないんだよね」などと言われます。２人の通った学校の校長先生方は、私も存じ上げており、くだらない話などしない人たちであることは、彼らの名誉のために付け加えておきます。ですから、これは、受け手としての我が娘の資質の問題なのだと思います。ただ、彼女たちとしては、つらく退屈な時間を過ごしたということを、身近な教育関係者である私に訴えたいということなのでしょう。その時に声を上げられなかった代償として。

そこで、私は、話をするときや文章を書くときには、聞いたり読んだりしない（できない、したくない）人がいることを前提として、どうしたら耳を傾けてもらえるか、読んでもらえるかを工夫するように心がけています。具体的には、「話や文章は短くシンプルにする」「分かりやすい例や具体的な数字を挙げる」「抑揚をつけたり、間をとったりする」等です。

もう、ずいぶん昔のことになりますが、ある音楽雑誌の編集長が、「雑誌を作る上で大切にしているのがサイレントマジョリティだ」と語っていたことを思い出します。感想や意見を寄せてくれる読者は、ほんの一部で、大部分は「物言わぬ多数派」というわけです。このことは、学校にも当てはまることかもしれません。児童も含め、日頃から、顔がよく見えて、ご意見やご感想をいただく方は大勢いらっしゃいます。でも、あくまでも静かに見守ってくださっている方、静かに期待してくださっている方も大勢いらっしゃることでしょう。もしかしたら、静かにお叱りくださっている方もいらっしゃるかもしれない。こうした声なき声に耳を傾け、自己改善していくための想像力は、大変重要だと思います。

経営学者のピーター・ドラッカーは、１３歳の時に牧師さんから「何によって憶えられたいか」と尋ねられ、未来の自分の姿を思い描くことの大切さに気付いたといいます。私もその考え方は重要だと思いますが、「私のことなど忘れてしまってもかまわない。私の教え子や私の学校の子どもたちが幸せになってくれさえすればそれでいい」と考えています。

校長としては、あくまで謙虚に、子どもたちの幸せのために、多様な考え方のよい面を受け入れていきたい。先日、ある大学の先生が新聞に寄せた記事に目が留まりました。紙面の関係で詳細は紹介できませんが、「当たり前は当たり前ではない」「学校は誰も幸せにしていないのではないか」「当たり前を抜け出すヒントは、『人が見向きもしない足下』にある。『足下』を知るためには、自分の経験と正しさを相対化することが必要」といった記事でした。私は、丁度、アガサ・クリスティの「春にして君を離れ」という本を読み直していたこともあり、目から鱗が落ちる思いがしました。今まで、正しいと信じていたことや、当たり前と思っていたことがそうではないということを認めるのには、大変な勇気が必要だからです。でも、これからの新しい時代を生きる子どもたちを育てる学校こそ、「足下を知ること」が必要なのかもしれません。私は、「足下に何があるか」知りたい。そして本当に必要とされる学校を創っていきたいと考えています。